

第2章 大学生の正社員への移行支援における相談機能の効果—大学の選抜性と支援

1. 問題の所在

本章の目的は、大学から職業への移行における支援（相談機能）の効果について、大学類型ごとに検討することである。

これまで大学生の学校から職業への移行においては、有名大学を対象に、学校歴（大学の選抜性）と企業規模が結びついていることが繰り返し指摘されてきた。有名大学だと大企業に就職する割合が高くなるという学（校）歴社会論である。こうした有名大学と企業の序列の対応は、90年代の不況期を通じて維持された（松尾 1999）。自由な労働市場の中で、大学生が学校歴という銘柄を背負っていっせいに競争するという、大卒移行モデルである。

しかしこれらの学（校）歴社会論において参照される大学群は、700校を超える大学のピラミッドの頂点のごく一部であると言ってよい。これまでの研究は、これらの大学の教育から職業への移行に関する分析をもって、日本の大学生の移行に一般化してきたのである。しかし荻谷らの分析は、非有名大学の就職プロセスは有名大学のそれとはかなり異なっていることを示唆している（荻谷ほか 2006）。学生はすべての応募者と競争するのではなく、学校歴によって配分されたトラックの中で、それぞれ競争しているという「分断的選抜」説（竹内 1995）もこの知見と一致するものである。すなわち、これまでクローズアップされてきた一部の有名大学におけるモデルだけではなく、それぞれの大学の選抜性における移行モデルが存在すると想定できる。

これまで対象となつてこなかった非有名大学の大半を占める新設大学は、移行における大学の関わり方に特徴があると言われている。労働政策研究・研修機構（2005）の調査によれば、90年代以降に設置された小規模な私立大学は、就職・キャリア形成支援に力を入れる学生一人当たりの職員や経費が高く、学生の移行支援に力を注いでいることが確認できる（労働政策研究・研修機構 2006）。新設大学の大半は卒業生が少ないため、新卒労働市場の中で不利な位置にある大学がとる行動とも考えられる。他方で、これまで就職支援の必要がなかった有名大学においても、就職・キャリア形成支援に力を入れはじめており、大学生の移行における支援の役割や効果に社会的関心が高まっていることがうかがえる。

そこで本稿は、大学生の正社員への移行における、就職支援・キャリア形成支援について分析するが、大学の支援全体については第4章に譲り、相談機能について焦点をあてる。大学の相談機能の充実は周知のとおりであるが、近年、若者が生きる世界としてのソーシャル・ネットワークという観点からも、相談機能に対する関心が高まっている。久木元（2006）はフリーターの分析から、相談相手からみるソーシャル・ネットワークには、若者が生きている意味世界の一部が表現されていることを示唆している。近年の若者支援においては、若者が生きている世界に寄り添った支援が効果的であることが明らかにされており（小杉・堀 2006）、支援の効果を高める上でも、相談機能に着目することは重要だと考えられる。

本章の構成は以下の通りである。第2節では本論文で用いるデータの概要について説明する。第3節では、支援パターンを抽出し、移行との関連を選抜性に基づく大学類型ごとに整理する。この整理に基づき支援類型を作成し、第4節で孤立型の特徴を探る。続く第5節では、支援類型がどのような役割を果たしているのかを検討する。第6節では知見を敷衍する。

2. データの概要

本章で用いるデータは、労働政策研究・研修機構が2005年10月～11月に実施した「大学生のキャリア展望と就職活動に関する実態調査」(調査1)である(調査の詳細は序章参照)。大学の選抜性は図表2-1に示す私立A、私立B、私立C、国立、公立の5類型による¹。

参考までに、入学方法について見ておこう(図表2-1)。まず大学の選抜性と入学者選抜との関連を見ると、大学の選抜性が高いと一般入試の割合が高いことは明らかである。

図表2-1 大学の選抜性と入学者選抜方法

大学ランク	計	一般入試	AO入試	一般推薦・指定校推薦	その他	無回答	N
私立A	100.0	62.5	1.7	29.3	6.3	0.2	933
私立B	100.0	49.9	2.2	39.1	8.2	0.6	6591
私立C	100.0	32.5	9.1	50.9	7.1	0.4	3396
国立	100.0	78.9	0.8	16.1	3.9	0.3	3747
公立	100.0	75.5	0.0	21.3	2.9	0.3	1524
不明	100.0	32.3	9.0	51.6	6.8	0.4	279
合計	100.0	55.7	3.2	34.3	6.4	0.4	16470

また、大学の選抜性と出身学科の関係をみると(図表2-2)、大学の選抜性が低いほど、出身学科が多様な学生の割合が増加する。

図表2-2 大学の選抜性と出身学科

大学ランク	計	普通科	専門学科	その他	無回答	N
私立A	100.0	94.3	4.5	0.6	0.5	933
私立B	100.0	89.2	7.9	2.0	0.9	6591
私立C	100.0	72.0	23.3	3.4	1.3	3396
国立	100.0	91.3	6.6	1.4	0.8	3747
公立	100.0	87.6	8.7	2.9	0.9	1524
合計	100.0	86.0	10.9	2.1	0.9	16470

¹ 設置者と入学難易度により類型化した。国立、公立、私立A(偏差値57以上)、私立B(偏差値46～56)、私立C(偏差値45以下)。偏差値は、代々木ゼミナールの主に社会科学系の偏差値ランキングに基づく。私立Aはこれまで対象となってきた大学とほぼ一致する銘柄大学である。ただし、異なる学部を持つ大学においても、社会科学系によって大学の選抜性を分類しているため、大学ごとの分断的選抜を詳細に検討するものではないが、大まかな把握は可能である。

したがって大学の選抜性が下のほうに位置する大学では、これまで想定されてきたような「一般入試・普通科出身」である伝統的な学生の割合は低く、多様な学生を抱えるようになっていくことがうかがえる。

なお各大学における学生の抽出は、できる限り該当大学の学生全体を代表する構成になるように依頼したが、学事日程等の都合で、内定者のみに配布した場合や一部の学部のみ配布したことがあるため、各大学の内定者割合が8割を超える場合、または回答数が30人未満の大学は分析対象から除外した。また、配布数も大学の状況によって異なり一律ではない。本稿では、これらの条件をクリアした対象者のうち、進学（希望）者などを除いた11,741人を対象として分析する。

3. 支援変数と移行状態

はじめに、各大学の学生が利用した支援を概観する。

図表2-3から7は、多重回答で「就職活動について悩んだ時、誰に相談しましたか」という設問への解答と、進路との関連を提示した。大学内の友だちがもっとも割合として高く、親などの保護者、大学内外の友だちが上位にあることは共通している。先輩については、私立Aと国公立が高く、私立B、私立Cは低い。大学の先生・職員・カウンセラーは私立Cでもっとも高く、私立A、私立Bは同水準にあり、国公立ではやや下がる。

図表2-3 進路と支援（私立A）

	親などの保護者	大学内の友だち	大学外の友だち	きょうだい	恋人	先輩	大学の先生・職員など	公的な就職支援機関	その他	誰も相談しなかった	N
正社員内定	64.7	82.9	46.2	21.0	34.1	35.3	38.4	5.1	0.3	4.5	604
内定なし・就活中	62.7	75.9	32.5	20.5	25.3	10.8	54.2	6.0	1.2	4.8	83
無活動・就職希望	85.0	80.0	40.0	15.0	30.0	15.0	40.0	5.0	0.0	5.0	20
未定・迷っている	88.9	77.8	44.4	11.1	55.6	44.4	11.1	22.2	0.0	0.0	9

私立Aは、「正社員内定」で、大学内外の友だち、恋人、先輩の割合が高く、「内定なし・就活中」は、大学の先生・職員で高い。「無活動・就職希望」「未定・迷っている」はNの数が多いので、分析は控える。

図表 2-4 進路と支援（私立 B）

	親などの保護者	大学内の友だち	大学外の友だち	きょうだい	恋人	先輩	大学の先生・職員など	公的な就職支援機関	その他	誰にも相談しなかった	N
正社員内定	63.8	77.1	48.1	21.9	32.2	21.7	40.9	3.3	0.5	4.2	3363
内定なし・就活中	62.0	74.8	46.9	21.1	21.7	14.6	36.3	5.0	0.2	5.4	1070
無活動・就職希望	47.2	66.5	46.0	16.8	28.6	13.7	27.3	2.5	0.6	8.1	161
未定・迷っている	46.2	65.4	37.2	16.7	28.2	6.4	25.6	0.0	0.0	23.1	78

私立 B においては、「正社員内定」「内定なし・就活中」が類似しており、支援が多様性に富んでいる。恋人、先輩、大学の先生・職員などの割合が「正社員内定」では高くなっていることが特徴である。

「無活動・就職希望」「未定・迷っている」は全体として低い、先輩、大学の先生・職員などがとりわけ低く、「未定・迷っている」では誰にも相談しなかった割合が高い。

図表 2-5 進路と支援（私立 C）

	親などの保護者	大学内の友だち	大学外の友だち	きょうだい	恋人	先輩	大学の先生・職員など	公的な就職支援機関	その他	誰にも相談しなかった	N
正社員内定	59.1	66.4	40.9	17.2	27.9	17.6	46.0	3.3	1.1	6.5	1672
内定なし・就活中	61.1	68.4	46.4	19.3	21.0	19.6	42.9	5.5	0.4	6.6	715
無活動・就職希望	56.8	67.6	45.0	20.7	25.2	10.8	32.4	2.7	0.9	9.9	111
未定・迷っている	45.1	45.1	47.1	9.8	23.5	19.6	23.5	5.9	0.0	11.8	51

私立 C も私立 B と同様に、「正社員内定」「内定なし・就活中」は類似しており、支援が多様性に富んでいる。大学の先生・職員などで大きな差がみられ、「正社員内定」でもっとも高くなっている。

図表 2-6 進路と支援（国立）

	親などの保護者	大学内の友だち	大学外の友だち	きょうだい	恋人	先輩	大学の先生・職員など	公的な就職支援機関	その他	誰にも相談しなかった	N
正社員内定	62.2	78.4	39.3	21.4	33.4	27.9	26.5	5.2	0.6	4.2	1494
内定なし・就活中	66.0	77.2	37.3	23.1	37.7	29.5	32.8	7.1	0.0	5.2	268
無活動・就職希望	60.0	74.5	40.0	12.7	27.3	32.7	12.7	5.5	3.6	3.6	55
未定・迷っている	69.6	60.9	17.4	8.7	26.1	17.4	26.1	4.3	0.0	17.4	23

国立において特に差が見られるのは、大学の先生・職員などの利用であり、「内定なし・就活中」で高く、「無活動・就職希望」で低い。「未定・迷っている」はNの数が少ないので、分析は控える。

図表 2-7 進路と支援（公立）

	親などの保護者	大学内の友だち	大学外の友だち	きょうだい	恋人	先輩	大学の先生・職員など	公的な就職支援機関	その他	誰にも相談しなかった	N
正社員内定	57.1	77.4	43.3	20.6	31.9	23.5	37.5	4.1	0.4	4.1	809
内定なし・就活中	54.8	77.0	40.7	23.7	25.9	17.8	40.7	5.9	0.0	5.2	135
無活動・就職希望	54.5	72.7	36.4	27.3	22.7	18.2	13.6	0.0	0.0	4.5	22
未定・迷っている	80.0	80.0	30.0	30.0	10.0	30.0	60.0	0.0	0.0	0.0	10

公立では、「正社員内定」が、先輩、恋人の割合がやや高いものの、「正社員内定」「内定なし・就活中」にはあまり差が見られない。「無活動・就職希望」「未定・迷っている」はNの数が少ないので、分析は控える。

以上から、進路と支援の利用の差が明確なのは、私立 B および私立 C であった。「正社員内定」は、支援が多様で、「大学の先生・職員」の利用度が高い。私立 A と国立は、「内定なし・就活中」で学校の支援を利用する割合が高いが、公立は大きな差が見られなかった。

しかしこの設問はいくつでも○をつけてもらう設問のため、個人のレベルにおける支援については不明である。そのため個人ごとの支援パターンを抽出することにした。手順は以下のとおりである。

まず公的機関やその他については割合が低いことから除いた。また選択肢の数が多ことから、支援の提供先によって分類することにした。

保護者・兄弟は家庭という集団であるという意味で同一の集団に分けられ、また友達も同年代の集団と見なすことができる。学校を通じて得られる支援として、先輩と、学校の先生・職員・相談員を分けて分析してみたが同様の傾向を示したため、同一の道筋とみなしてひとつに整理した。恋人は単独の支援とした。支援を合計4つの経路から把握する。

はじめに、経路の多様さを簡略に見るため、経路を足し合わせたものを図表 2-8 に示した（なお、単純に相談相手数カテゴリーを足し合わせてみると、5つまでは多いほうが正社員内定率は高くなるが、6つ以上のカテゴリーの人数は少なくなる。）

図表 2-8 経路のチャンネル数

	数	正社員内 定	内定な し・就活 中	無活動・ 就職希望	無活動・ 未定・ 迷ってい る	計	N
私立A	0	75.6	17.1	2.4	4.9	100.0	41
	1	83.1	15.7	1.1	0.0	100.0	89
	2	83.9	10.7	4.0	1.3	100.0	224
	3	86.5	10.4	2.7	0.4	100.0	259
	4	82.7	11.8	1.8	3.6	100.0	110
	計	82.7	11.6	3.4	2.3	100.0	735
私立B	0	56.8	30.3	6.9	6.0	100.0	333
	1	67.1	26.1	5.3	1.6	100.0	833
	2	68.7	26.1	3.7	1.4	100.0	1587
	3	76.3	20.0	2.4	1.2	100.0	1443
	4	81.3	15.8	1.9	1.1	100.0	571
	計	68.3	22.3	6.2	3.2	100.0	4985
私立C	0	59.0	28.3	7.4	5.3	100.0	244
	1	63.9	27.9	5.1	3.1	100.0	513
	2	65.4	28.9	3.9	1.8	100.0	840
	3	65.1	29.4	4.2	1.3	100.0	744
	4	72.6	22.8	3.0	1.5	100.0	263
	計	61.8	26.7	7.1	4.3	100.0	2744
国立	0	54.9	33.1	8.5	3.5	100.0	142
	1	81.1	13.9	3.3	1.8	100.0	338
	2	84.3	12.0	3.2	0.5	100.0	626
	3	80.3	16.2	2.4	1.1	100.0	538
	4	78.3	17.7	2.4	1.6	100.0	249
	計	74.9	15.0	6.2	4.0	100.0	2013
公立	0	66.7	23.3	10.0	0.0	100.0	60
	1	81.6	15.3	2.6	0.5	100.0	190
	2	81.9	13.0	3.7	1.4	100.0	353
	3	84.6	14.0	0.3	1.0	100.0	286
	4	84.8	12.4	1.9	1.0	100.0	105
	計	78.8	13.7	4.7	2.7	100.0	1034

注：無回答は省略した。

いずれにおいても、相談相手がない（経路数が0）は、正社員内定の割合は低くなっている。また国立、私立Aを除くと、経路が多いほど、内定率も高まっている。

私立Aは、1つ以上であれば正社員内定の割合はほとんど変わらず、支援の多様さによって、正社員内定割合が変化しているわけではない。私立Bは、1から2だと変わらないが、3以上だと内定の割合が高い。私立Cは経路が多いほど内定率が高まっているが、特に4つだと高い。国立は多いほど内定率が高まっているわけではなく、2がもっとも正社員内定割合が高い。公立は経路が多いほど、内定率も高まっている。

私立Aおよび国立については、経路と正社員内定率の明確な関連は見られないが、私立B、C、公立ではいずれも差が見られ、経路数が多いほど正社員内定率は上昇するという関係が存在する。

詳しく展開しよう。以下の2-9～13の図表においては、保護者・兄弟（以下、保護者）、友達、恋人、先輩・学校（以下、学校）の組み合わせを示している。

全体的な傾向としては、国立を除き、友だちのみ、友だち+先輩・学校、保護者+友だち、保護者・友だち・学校、保護者+友だち+恋人+学校、のパターンが上位5パターンを占めている。大学の選抜性は問わず、大学生の移行支援に共通するパターンである。これらのよく見られるパターンのうち、もっとも内定率が高いのは、私立B、私立Cとも、保護者+友だち+恋人+学校である。私立A、公立は各カテゴリーの人数が少なく、判断が難しいが、私立Aでは学校+恋人、国立は友達+学校が上位に位置している。

図表2-9 支援パターン（私立A）

	正社員内 定	内定な し・就活 中	無活動・ 就職希望	無活動・ 未定・ 迷ってい る	N
なし	75.6	17.1	2.4	4.9	41
学校	64.3	35.7	0.0	0.0	14
恋人	75.0	25.0	0.0	0.0	4
学校+恋人	100.0	0.0	0.0	0.0	2
友達	86.8	11.3	1.9	0.0	53
学校+友達	90.0	10.0	0.0	0.0	70
友達+学校	85.7	14.3	0.0	0.0	21
友達+学校+恋人	96.6	0.0	3.4	0.0	29
保護者	88.9	11.1	0.0	0.0	18
保護者+学校	85.7	14.3	0.0	0.0	14
保護者+恋人	55.6	11.1	22.2	11.1	9
保護者+恋人+学校	100.0	0.0	0.0	0.0	5
保護者+友達	81.5	10.2	6.5	1.9	108
保護者+友達+学校	82.0	14.4	3.0	0.6	167
保護者+友達+恋人	93.1	5.2	1.7	0.0	58
保護者+友達+恋人+学校	82.7	11.8	1.8	3.6	110
合計	82.7	11.6	3.4	2.3	735

注：無回答は省略した。

図表 2-10 支援パターン (私立 B)

	正社員内 定	内定な し・就活 中	無活動・ 就職希望	無活動・ 未定・ 迷ってい る	N
なし	56.8	30.3	6.9	6.0	333
学校	70.8	20.8	5.2	3.1	96
恋人	69.2	20.5	7.7	2.6	39
学校+恋人	88.2	11.8	0.0	0.0	17
友達	67.8	25.5	5.2	1.5	522
学校+友達	70.8	24.8	3.3	1.1	363
友達+学校	69.9	21.5	8.0	0.6	163
友達+学校+恋人	78.6	14.9	3.2	3.2	154
保護者	62.5	31.8	5.1	0.6	176
保護者+学校	70.7	25.3	3.3	0.7	150
保護者+恋人	75.5	18.4	4.1	2.0	49
保護者+恋人+学校	88.6	8.6	2.9	0.0	35
保護者+友達	66.5	28.5	3.1	1.9	845
保護者+友達+学校	75.1	22.4	2.0	0.6	898
保護者+友達+恋人	77.2	17.4	3.1	2.2	356
保護者+友達+恋人+学校	81.3	15.8	1.9	1.1	571
合計	68.3	22.3	6.2	3.2	4985

注：無回答は省略した。

図表 2-11 支援パターン (私立 C)

	正社員内 定	内定な し・就活 中	無活動・ 就職希望	無活動・ 未定・ 迷ってい る	N
なし	59.0	28.3	7.4	5.3	244
学校	75.0	20.7	2.2	2.2	92
恋人	66.7	22.2	11.1	0.0	27
学校+恋人	80.0	10.0	0.0	10.0	10
友達	61.0	29.7	5.9	3.3	269
学校+友達	69.1	26.7	2.1	2.1	236
友達+学校	73.8	21.3	2.5	2.5	80
友達+学校+恋人	66.7	28.6	3.2	1.6	63
保護者	61.6	30.4	4.0	4.0	125
保護者+学校	63.1	31.5	4.6	0.8	130
保護者+恋人	77.4	19.4	3.2	0.0	31
保護者+恋人+学校	65.7	31.4	2.9	0.0	35
保護者+友達	60.3	32.6	5.4	1.7	353
保護者+友達+学校	63.7	31.9	3.4	1.0	498
保護者+友達+恋人	68.9	20.9	7.4	2.7	148
保護者+友達+恋人+学校	72.6	22.8	3.0	1.5	263
合計	61.8	26.7	7.1	4.3	2744

注：無回答は省略した。

図表 2—12 支援パターン (国立)

	正社員内 定	内定な し・就活 中	無活動・ 就職希望	無活動・ 未定・ 迷ってい る	N
なし	54.9	33.1	8.5	3.5	142
学校	82.8	13.8	3.4	0.0	29
恋人	77.8	22.2	0.0	0.0	18
学校+恋人	80.0	20.0	0.0	0.0	10
友達	83.5	12.7	2.8	0.9	212
学校+友達	81.9	12.9	5.2	0.0	116
友達+学校	90.6	8.2	1.2	0.0	85
友達+学校+恋人	78.9	17.5	3.5	0.0	57
保護者	74.7	15.2	5.1	5.1	79
保護者+学校	86.4	9.1	4.5	0.0	44
保護者+恋人	70.4	25.9	3.7	0.0	27
保護者+恋人+学校	82.4	17.6	0.0	0.0	17
保護者+友達	84.6	11.6	2.9	0.9	344
保護者+友達+学校	80.4	16.3	2.0	1.3	306
保護者+友達+恋人	80.4	15.2	3.2	1.3	158
保護者+友達+恋人+学校	78.3	17.7	2.4	1.6	249
合計	74.9	15.0	6.2	4.0	2013

注：無回答は省略した。

図表 2—13 支援パターン (公立)

	正社員内 定	内定な し・就活 中	無活動・ 就職希望	無活動・ 未定・ 迷ってい る	N
なし	66.7	23.3	10.0	0.0	60
学校	81.8	18.2	0.0	0.0	22
恋人	90.9	9.1	0.0	0.0	11
学校+恋人	100.0	0.0	0.0	0.0	5
友達	80.0	16.0	3.2	0.8	125
学校+友達	86.0	13.0	1.0	0.0	100
友達+学校	85.4	8.3	6.3	0.0	48
友達+学校+恋人	83.8	16.2	0.0	0.0	37
保護者	84.4	12.5	3.1	0.0	32
保護者+学校	79.3	10.3	3.4	6.9	29
保護者+恋人	84.6	15.4	0.0	0.0	13
保護者+恋人+学校	77.8	22.2	0.0	0.0	9
保護者+友達	77.8	15.2	5.1	1.9	158
保護者+友達+学校	82.8	14.8	0.6	1.8	169
保護者+友達+恋人	90.1	9.9	0.0	0.0	71
保護者+友達+恋人+学校	84.8	12.4	1.9	1.0	105
合計	78.8	13.7	4.7	2.7	1034

注：無回答は省略した。

パターンの数が多いため、以下の3つの類型に分類した（図表2-14）。まったく相談相手のない孤立型、学校が相談相手として選ばれていれば学校型、学校は選ばれず、保護者や友達が相談相手の場合には友達・保護者型とした。

孤立型はどのランクでも最も正社員内定率が低い、私立A、国立、公立は、学校型と友達・保護者型が拮抗している。私立Bと私立Cは、学校型が最も正社員内定率が高い²。

図表2-14 支援類型と進路

	類型	合計	正社員内定	内定なし・就活中	無活動・就職希望	無活動・未定・迷っている	N
私立A	孤立型	100.0	75.6	17.1	2.4	4.9	41
	学校型	100.0	84.4	12.4	1.9	1.2	411
	友達・保護者型	100.0	84.9	10.0	4.1	1.1	271
	合計	100.0	82.7	11.6	3.4	2.3	735
私立B	孤立型	100.0	56.8	30.3	6.9	6.0	333
	学校型	100.0	76.0	20.4	2.5	1.1	2284
	友達・保護者型	100.0	68.8	25.3	4.2	1.7	2150
	合計	100.0	68.3	22.3	6.2	3.2	4985
私立C	孤立型	100.0	59.0	28.3	7.4	5.3	244
	学校型	100.0	67.4	28.0	3.1	1.4	1327
	友達・保護者型	100.0	63.6	28.4	5.5	2.5	1033
	合計	100.0	61.8	26.7	7.1	4.3	2744
国立	孤立型	100.0	54.9	33.1	8.5	3.5	142
	学校型	100.0	80.3	15.9	2.8	1.0	828
	友達・保護者型	100.0	82.8	13.1	2.9	1.2	923
	合計	100.0	74.9	15.0	6.2	4.0	2013
公立	孤立型	100.0	66.7	23.3	10.0	0.0	60
	学校型	100.0	83.8	13.9	1.1	1.3	476
	友達・保護者型	100.0	82.1	13.5	3.5	0.9	458
	合計	100.0	78.8	13.7	4.7	2.7	1034

注：無回答は省略した。

² 保護者の経済的援助については、私立Aで特に高く、国公立で低い。

参考図表 就職活動にかかるお金（リクルートスーツ代、交通費など）を保護者に援助してもらった

大学ランク	計	よくあてはまる	まああてはまる	あまりあてはまらない	まったくあてはまらない	無回答	N
私立A	100.0	46.8	22.0	11.1	18.4	1.8	849
私立B	100.0	42.0	23.6	12.0	19.5	2.8	5837
私立C	100.0	39.6	22.5	13.5	22.1	2.3	3073
国立	100.0	35.6	22.4	12.5	24.4	5.1	2685
公立	100.0	38.5	21.8	13.2	23.8	2.7	1225
合計	100.0	40.2	22.9	12.5	21.3	3.0	13922

注：無回答は省略した。

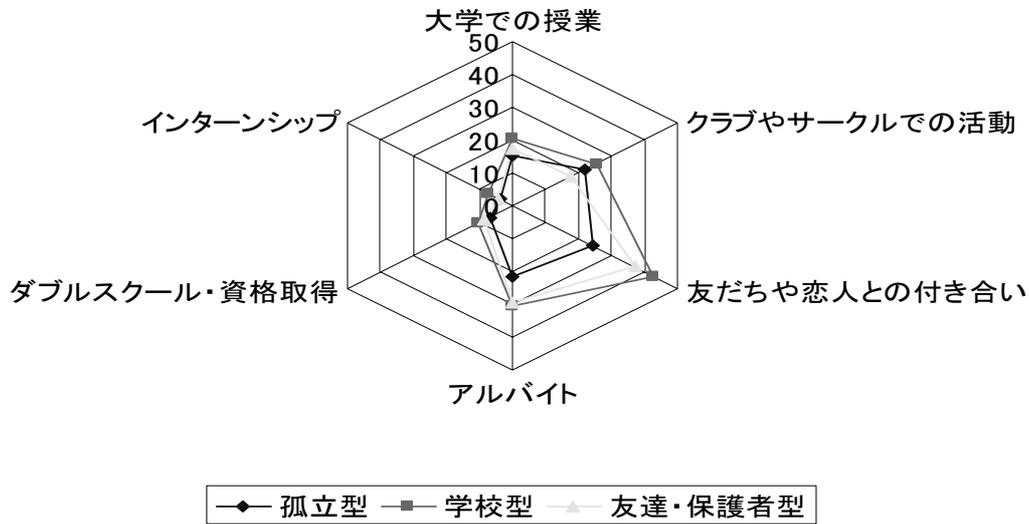
どの大学の選抜性でも、「よくあてはまる」ほど、正社員内定率が高い。

4. 支援類型と大学生活

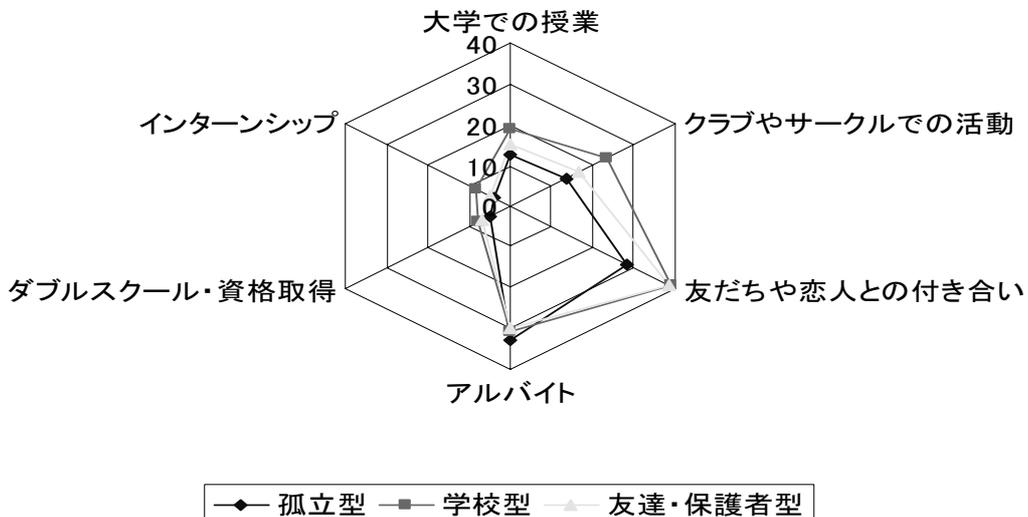
なぜ就職活動時に、支援のヴァリエーションが生じるのだろうか。各類型のサンプルが確保されている私立 B および私立 C について、もっとも就職が困難な孤立型に着目して分析する。

私立 B の大学生活の差に着目すると（図表 2-15）、孤立型は、全体として大学生活で熱心に取り組んだ事柄が少なかったことがわかる。特に、友達や恋人とのつきあいやアルバイトなどについて差が大きい。

図表 2-15 大学時代、熱心に行なったこと（私立 B：「よくあてはまる」の割合）



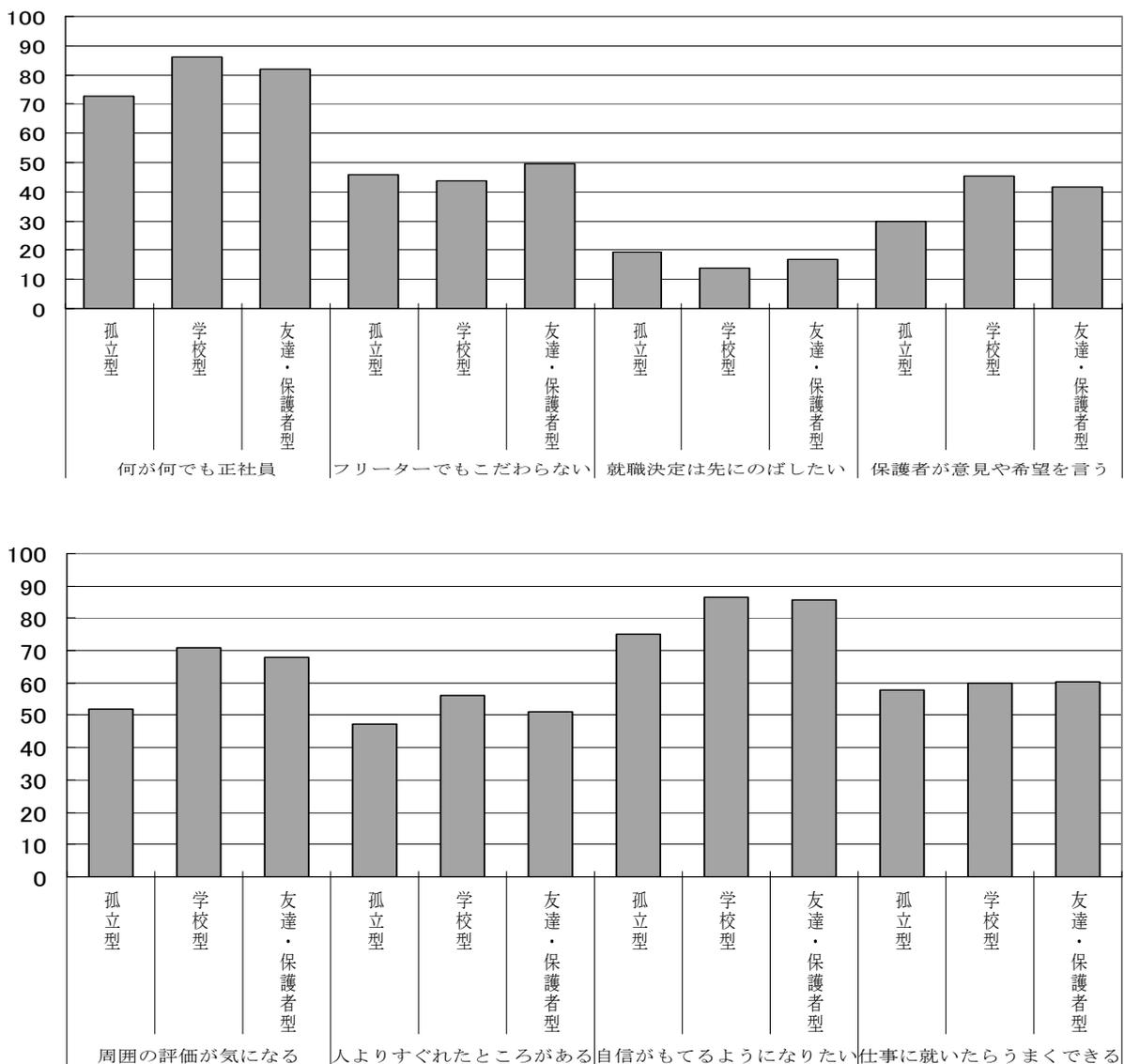
図表 2-16 大学時代、熱心に行なったこと（私立 C）



私立 C においては（図表 2-16）、孤立型はアルバイトへの熱心度が高く、友達や恋人とのつきあいで差が大きい。

続いて、支援類型と職業意識について検討した。

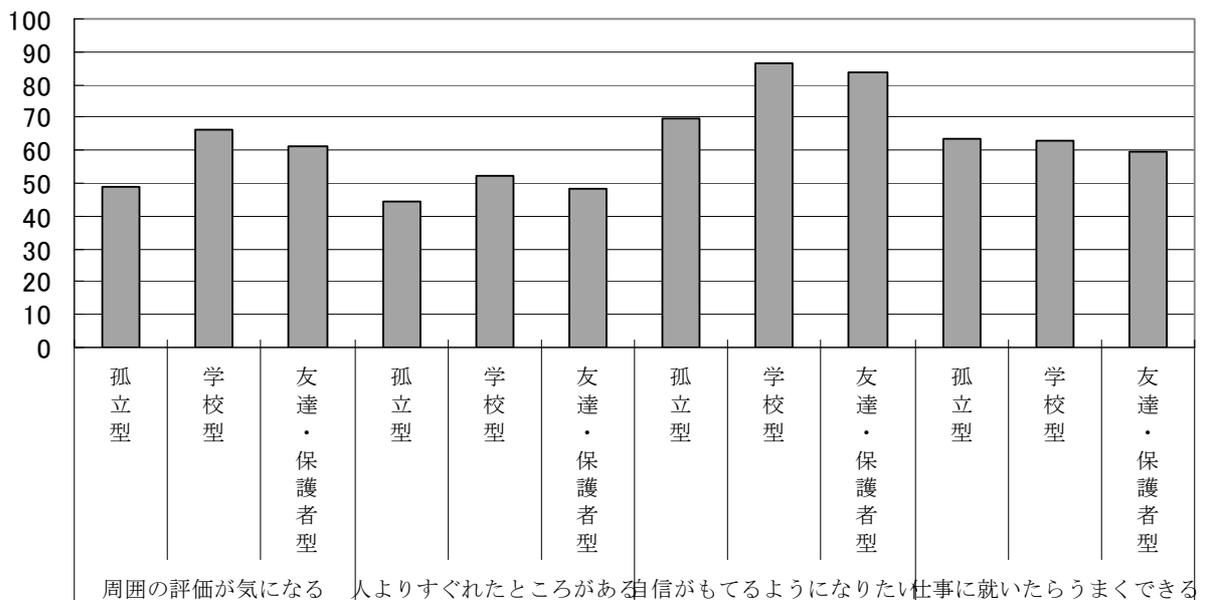
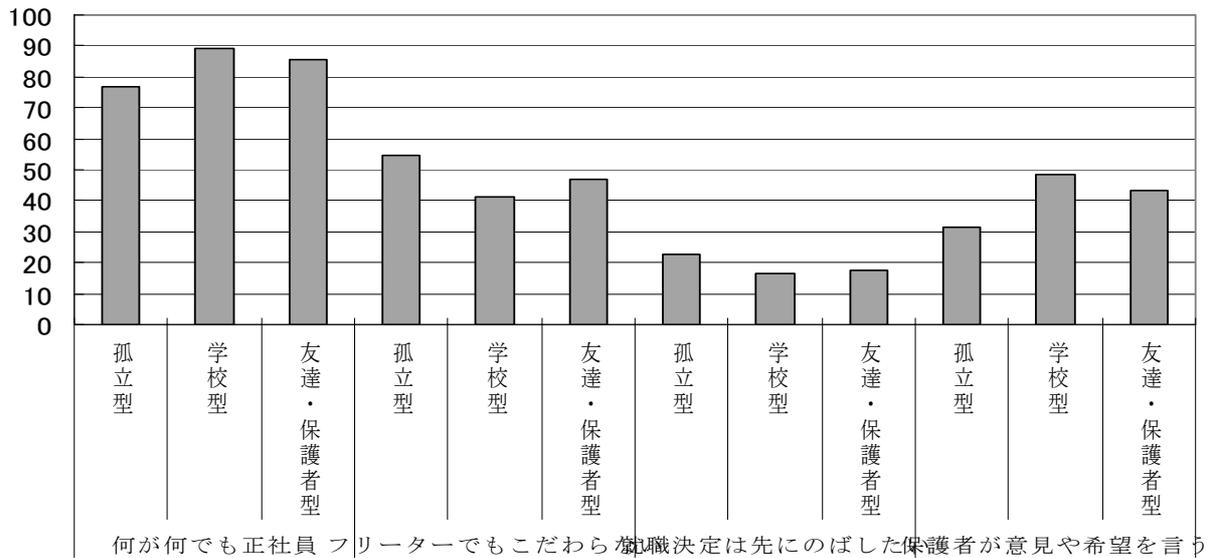
図表 2-17 支援類型と職業意識（私立 B）



注：「よくあてはまる」「まああてはまる」の合計の数値を示している

図表 2-17 をみると、私立 B の孤立型は、「大学を卒業するときには、何が何でも正社員になりたい」、「私の親や保護者は、進路や就職先について具体的に意見や希望を言うことがよくある」、「周りの人からどのように評価されているのか気になる」、「自分には人よりすぐれたところがある」などの割合が低い。

図表 2-18 支援類型と職業意識（私立 C）

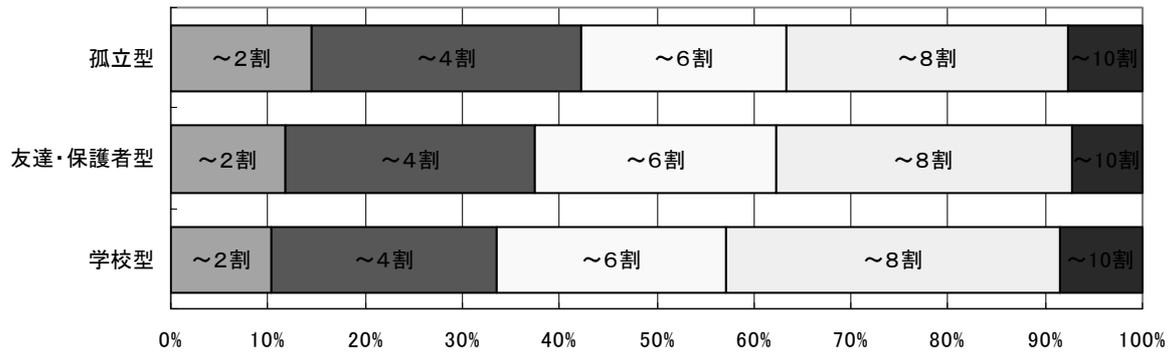


図表 2-18 をみると、私立 C の孤立型は、「やりたいことであれば、正社員でも、フリーターでもこだわらない」が高く、「私の親や保護者は、進路や就職先について具体的に意見や希望を言うことがよくある」、「周りの人からどのように評価されているのか気になる」で低くなっている。

続いて、支援類型と成績について検討した。

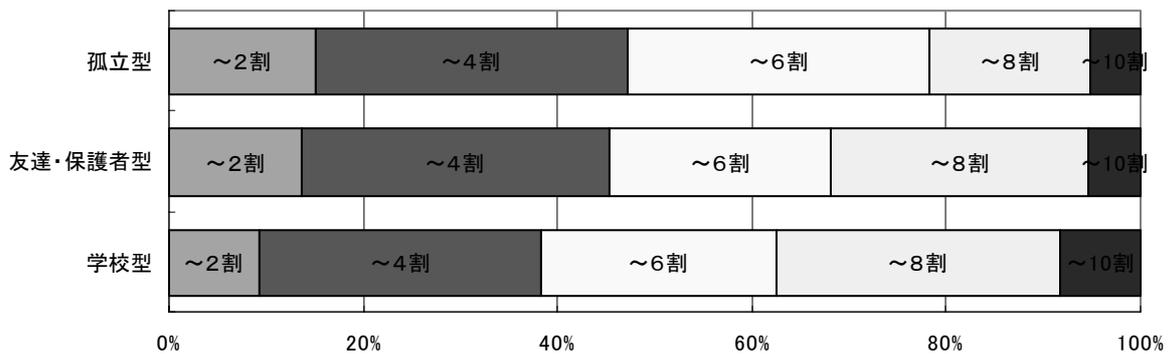
私立 B においては（図表 2-19）、学校型がもっとも成績がよい者の割合が高く、孤立型は成績が悪い者の割合が相対的に高くなっている。

図表 2-19 支援類型と成績（優の割合：私立 B）



私立 C についても（図表 2-20）、学校型がもっとも成績がよい者の割合が高く、孤立型は逆の傾向を示す。

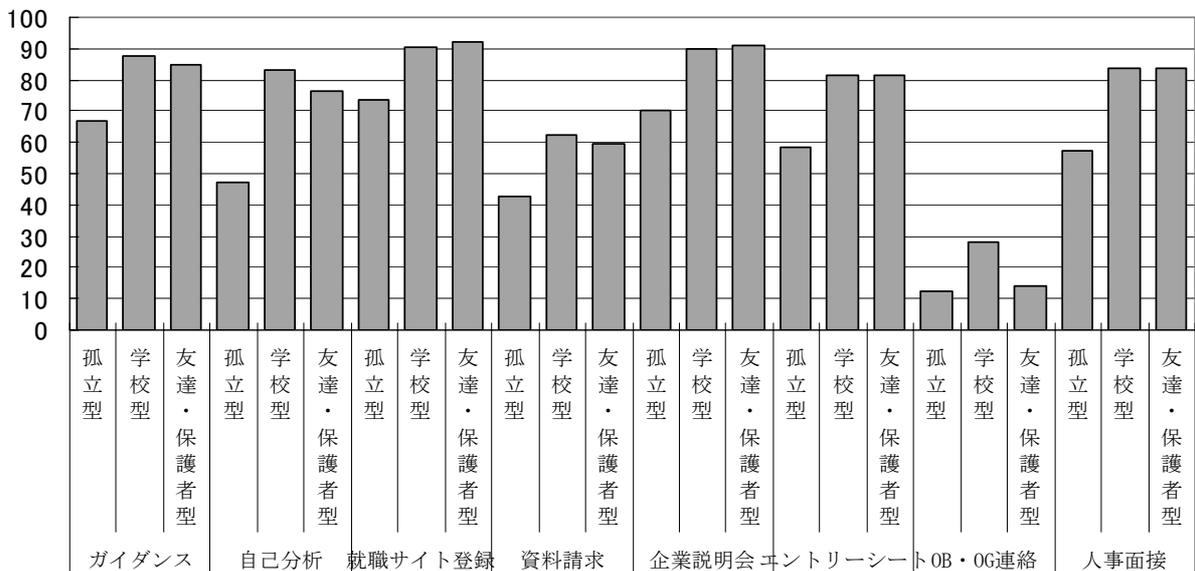
図表 2-20 支援類型と成績（優の割合：私立 C）



それでは就職活動においてはどうか。

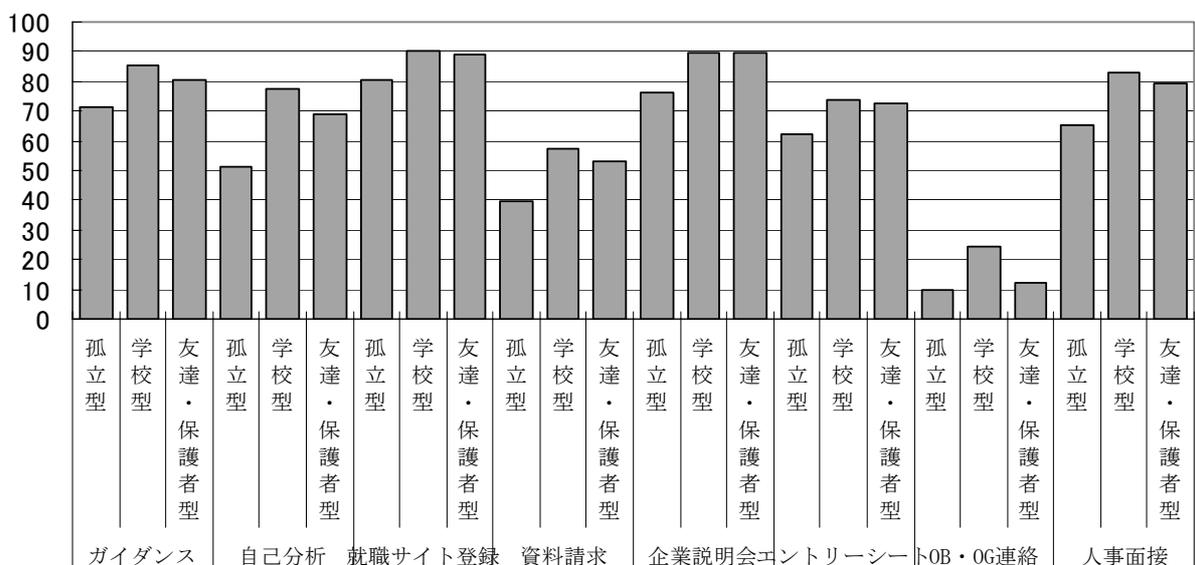
図表 2-21 においては、私立 B の学校型と友達・保護者型は OB・OG への連絡以外は似た傾向を示しており、ガイダンス、自己分析、就職サイト登録、資料請求、企業説明会、エントリーシートの提出や人事面接など、ほとんど差が見られない。孤立型はいずれにおいてもかなり低く、就職活動への参加という点でつまづいていることがうかがえる。特に、自己分析やエントリーシートの提出、人事面接への参加において差が大きい。

図表 2-21 支援類型と就職活動への参加（私立 B）



図表 2-22 においては、私立 C の学校型と友達・保護者型についても、OB・OG への連絡以外はほとんど差が見られない。孤立型はいずれにおいてもかなり低い。自己分析、エントリーシートの提出、人事面接への参加の度合いが低い。

図表 2-22 支援類型と就職活動（私立 C）



大学ランクごとに孤立型の特徴を整理する。

私立 B の孤立型は、全般的に大学生活で熱心に取り組んだ事柄の割合が低い。また、正社員志向がやや弱く、保護者とのやりとりが少ない。また成績がよい者も含まれるが、全体と

しては成績がよくない者の割合が多い。就職活動への参加は低調だが、特に自己分析やエントリーシートの提出、人事面接に至っていない。

私立 C の孤立型は、クラブサークルや友達や恋人とのつきあいで熱心に取り組んだ割合が特に低い。アルバイトには熱心に取り組んでいる。全体として成績がよくない者の割合が高い。正社員志向はやや弱く、保護者が具体的に希望を表明する機会は少ない。就職活動への参加していない割合が高いが、特に自己分析やエントリーシートの提出、人事面接に至っていないことが特徴である。

5. 支援類型と正社員内定の規定要因

続いて、これらの支援タイプが正社員内定に影響を及ぼしているかどうかについて、二項ロジスティック分析により検討した。使用した変数は以下のとおりである。

性別：男子を「1」女子を「0」とする男性ダミーを作成。

学部：文系（教育学部を除く）、理系、教育・その他、に分類。

文系を基準に、理系ダミー、教育ダミーを作成。

地域：首都圏、中部・東海、近畿を「1」、北海道・東北、北関東、四国、九州・沖縄を「0」とするダミー変数を作成。

成績：優の割合について自己評価。

経済的支援：「就職活動にかかるお金（リクルートスーツ、交通費など）を保護者に援助してもらった」という質問文に対する回答（1. よくあてはまる から 4. まったくあてはまらない）

従属変数：「正社員内定」= 1、未内定者 = 0（「内定なし・就活中」= 1、「無活動・就職希望」「無活動・未定・迷っている」= 0）

支援類型：リファレンスは「孤立型」

*** 0.01>p *0.05>p *0.1>p

図表 2-23 正社員内定と支援類型（ロジスティック分析）

	私立A		私立B		私立C			
男性ダミー	0.869	***	男性ダミー	0.4739	***	男性ダミー	0.497	***
理系ダミー	-0.682	***	理系ダミー	0.8311	***	理系ダミー	1.110	***
教育ダミー	-0.706		教育ダミー	-1.4521	***	教育ダミー	-1.605	***
地方ダミー	-0.487	*	地方ダミー	-0.6246	***	地方ダミー	-0.205	**
成績	0.104	*	成績	0.0223		成績	0.091	***
学校型	0.502		学校型	0.7601	***	学校型	0.444	***
保護者型	0.583		保護者型	0.3901	***	保護者型	0.303	*
援助	-0.017	**	援助	-0.0128	***	援助	-0.007	**
定数	0.986	*	定数	0.3419	***	定数	-0.458	**
Cox & Snell R ² = 0.0497 N=731			Cox & Snell R ² = 0.08073 N=4784			Cox & Snell R ² = 0.0739 N=2653		
	国立		公立					
男性ダミー	0.125		男性ダミー	1.360	***			
理系ダミー	0.554	***	理系ダミー	0.731	**			
教育ダミー	-1.611	***	教育ダミー	-2.252	***			
地方ダミー	-0.297	**	地方ダミー	-0.602	**			
成績	-0.051	*	成績	0.063				
学校型	0.566	**	学校型	0.851	*			
保護者型	0.649	**	保護者型	0.584				
援助	-0.018	***	援助	-0.023	***			
定数	1.555	***	定数	0.908				
Cox & Snell R ² = 0.100 N=1911			Cox & Snell R ² = 0.1516 N=1000					

国立大学については、教育学部であること、地方であること、援助がないことはマイナスになっており、理系であることはプラスになっている。成績がよいことはマイナスになっている。支援類型は孤立型に比べて、学校型・保護者型ともプラスである。

公立大学については、教育学部であること、地方であること、援助が少ないことはマイナスになっており、男性であること、理系であることはプラスになっている。支援類型は孤立型に比べて学校型がプラスであるが、保護者型の効果は見られない。

私立Aについては、文系学部に対して、教育学部であること、理系であること、地方であることはマイナスになっている。男性であること、成績がよいこと、経済的援助があることもプラスである。相談タイプの効果は見られない。

私立Bについては、男性、理系は文系に比べてプラスであり、教育学部、地方に立地することはマイナスである。支援類型は、学校型、保護者型とも孤立型に比べてプラスであり、保護者の経済的援助が少ないと、正社員内定を獲得しにくい。

私立Cについては、首都圏に比べて、北関東、中部、近畿、四国であることはプラスに働き、九州はマイナスになっている。また理系であることはプラス、教育はマイナスに働く。成績がよいことはプラスだが、保護者の経済的援助があることがマイナスになっている点が、他の大学類型とは異なっている点である。支援類型は、孤立型に比べて学校型、保護者型ともプラスである。

以上から、支援に着目したそれぞれの大学の選抜性群による、正社員内定の規定要因の様

相の共通点と相違を見出すことができる。

共通した傾向として、同水準の大学の選抜性にあっても、地方であると正社員内定は獲得しにくい。また国立を除くと男性であることがプラスであり、文系に比べて教育学部だと決まりにくく、理系だと決まりやすいという特徴がある。

他方で、私立 C を除くと、保護者の経済的援助が少ないと正社員内定の割合は低下する。成績については国立大学ではマイナスになっていたが、公立、私立 A、B、C ともプラスであった。また支援類型については、私立 A では正社員内定には効果はないが、国立、公立、私立 B、私立 C では効果が見られ、特に学校型の効果が現れている。

6. おわりに

本稿は、大学の相談機能の役割と効果に着目して分析を加えた。見出された知見は、以下のとおりである。

- 1) 正社員内定率と支援の関連が明確なのは、私立 B および私立 C であり、正社員内定者は支援が多様で、かつ特に大学が重要な役割を果たしていた。
- 2) 相談相手がないというのは、どのランクにおいても、正社員内定の確率を下げている。しかしチャンネル数については、私立 A ではチャンネル数の増加は正社員内定の確率を上昇させていないが、私立 B、私立 C、公立はチャンネル数が正社員内定の確率を上昇させる。国立は一貫した傾向が見られない。
- 3) 相談相手のパターンを「孤立型」「学校型」「保護者・友達型」に分類してみると、「孤立型」はいずれの大学の選抜性においても正社員内定割合が低かった。また私立 B、私立 C では「学校型」の正社員内定割合が高いが、私立 A、国立、公立は「学校型」と「保護者・友達型」にはあまり違いが見られない。
- 4) 私立 B、私立 C の孤立型の特徴を見ると、全般的に大学生活に消極的であり、正社員志向がやや弱く、また保護者からの働きかけが少ない傾向にある。就職活動では、自己分析やエントリーシートの提出、人事面接にまでたどりついていない。
- 5) 同じ大学の選抜性でも、地方は正社員内定が難しく、国立を除くと男性であることはプラスであり、文系に比べて教育学部だと決まりにくいという共通した傾向が見られる。保護者の経済的援助があると正社員内定は得やすく、国立を除くと、成績がよい方が就職は決まりやすい。学校が支援先に含まれる「学校型」の支援類型は、私立 A については正社員内定に効果はないが、国立、公立、私立 B、私立 C では効果が見られる。

こうした知見から、以下の示唆が得られる。

私立の上位ランクの大学や国立における支援の効果は限定的であったが、私立の中位以下ランクにおいては、多様な支援、特に学校の支援を利用することが正社員内定に効果をもっていた。全体としては大学の選抜性によって正社員内定率は異なるものの、より不利なラン

クの大学においては、支援が正社員内定の確率を上げている。特に中位以下ランクの大学における大学の支援の熱心さには合理的な理由が存在し、かつ効果を上げていると言えよう。

したがって、大卒労働市場において不利な位置にある大学においては、現在の支援を継続し、学生の孤立化を防ぐためにいっそう力を入れることが望まれる。これらの大学においては、上述したように、入試者選抜方法や出身学科において多様な学生が含まれるため、就職活動以前に大学に定着させる支援が欠かせない。

各大学において、低学年からのゼミの設定、キャリア教育科目を正規に設けるなど、多方面から支援の網がはりめぐらされつつあるが、それぞれの目的はまだ十分に学生に浸透しておらず、いまだ大学の支援を資源として利用しない学生層が存在している。どんな大学生活を送ることが将来のキャリアに対してどのような貢献をするのかについて、学生に対するメッセージがまだ曖昧に見受けられる。大学生活と将来のキャリアの関連性について、明確に示す必要がある。

第二に、同じような選抜性の大学においても、女性であること、地方に存在する大学であることは、正社員内定獲得に不利に働いている。今後さらに増加することが見込まれる女子学生に対しては、労働市場の違いをふまえた対応が必要である。

さらに、地方における学生の就職活動については、第3章で詳しく論じられているが、関連する論点を先取りして述べると、各地域において固有の就職活動の意識や様相が存在しており、日本全体をひとつの労働市場として見なせるような就職をしている学生はほんの一部に過ぎない。学生の地元志向の高まりに応じた、大学横断的な大卒就職支援のしくみを発展させることが必要であろう。

他方で、離学した時の状態がその後のキャリアを大きく規定する傾向が強まっている（労働政策研究・研修機構 2006）ことをふまえると、大卒労働市場では有利な立場にある大学の学生においても、離学する時点で正社員にスムーズに移行することの重要性はますます高まっている。これらの大学においては、同一大学の中での「格差」をどのように縮小できるかが支援のポイントとなるだろう。

なお本稿では大学生の移行について、正社員内定獲得を評価の変数として用いているが、正社員の内定を獲得することのみを評価の指標とすることは不十分であり、今後は、大学卒業後のキャリアや生活満足度など、多元的な検討がなされるべきである。

参考文献

荻谷剛彦ほか、2006、「大学から職業へⅢ その1」、『東京大学大学院教育学研究科紀要』第46巻。

久木元真吾、2006、「若者のソーシャル・ネットワークと就業・意識、大都市の若者の就業行動と移行過程」、『労働政策研究報告書』No.72。

堀健志ほか、2006、「大学から職業へⅢ その2」、『東京大学大学院教育学研究科紀要』第

46 卷.

竹内洋, 1995, 『日本のメリトクラシー』, 東京大学出版会.

松尾孝一, 1999, 「90年代の新規大卒労働市場」, 『大原社会問題研究所雑誌』 No482.